

ザビエル生誕500年

東光 博英

わが国に初めてキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルは、1506年4月7日、ナバラ王国（現スペイン・バスク地方）に生まれた。日本に渡来するのは、インドや東南アジアで宣教を行った後の49年のことで、それから2年3ヶ月の日本滞在を経て、52年12月3日に中国沿岸の上川島で病死する。滞在中、宣教は思い通りに行かなかったが、1000人弱のキリシタン（日本人信徒）を得て日本布教に道を開いた。

その経緯については、彼自身が記した多数の報告書があるほか、同行した宣教師や他の関係者の記録もあり、比較的詳しく知ることができる。優れた聖職者として崇敬され、とりわけ死後には遺徳を讃える幾多の言葉が寄せられている。来日前からザビエルを知る宣教師フロイスは彼の遺骸を迎える盛大な儀式について、「在世中の純潔さと聖徳を少なからず証明することだった」（『日本史』）と証言している。このように偉大な宣教師として讃えられ、「東洋の使徒」と仰がれるザビエルは、日本人にどのように迎えられたのか。西欧側の豊富な記録に比べて実に意外なことだが、日本滞在中の彼に関する記録は、わずかに『大内義隆記』だけであり、しかも「天竺人」の一語に過ぎない。ザビエルが山口の領主に献上した品々については具体的に述べながら、彼の名前にすら触れていない。直接謁見した大名の記録にしてこれである。九州からこの京都まで訪れながら、結局、ほとんど日本人の関心をひかなかったようだ。

今日、彼の布教は失敗であったとも評されるが、彼の蒔いた種はその後渡来した多数の宣教師に引き継がれ、初期の布教容認の時代から、豊臣秀吉のバテレン（宣教師）追放令に始まる布教黙認の時代、そして徳川幕府によるキリスト教禁止と排斥の時代へと続くおよそ一世紀の間、数々のドラマを日本各地で展開した。ところが、幕府による徹底的な弾圧と迫害を受け、最終的に日本が鎖国をしてもなお、彼の伝えた種は生き延び、変容しながら時を越えるのである。それから200年余り後の1865年、長崎・大浦天主堂のプチジャン神父のもとに隠れキリシタンが訪れて信仰を表明するという歴史的事件が生ずる。江戸時代の厳しい弾圧を逃れて潜伏した多数のキリシタンが代々信仰を維持していたのである。こうして見ると、一人の伝道師の新天地にかけける熱い思いが、その始まりこそささやかなものであり、また後には苛酷な弾圧の嵐にさらされながらも、埋み火のように数百年の時を経て現代にまで熱を伝えたことに感嘆の念を禁じ得ない。それはまた、人知れず信仰に命を賭した人々の苦難の歴史でもある。

ただ、かの時代の宣教師たちが福音を世界に広めようと抱いた熱意が、異教徒との「共生」ではなく、むしろその「撲滅」に向けられたとすれば甚だ悲しむべきことである。わが国では1570年代にキリシタン大名の領内で寺社がことごとく破壊され、領民の強制改宗が行われた。秀吉のバテレン追放令の第二条はまさにその行為を非難する内容になっている。1579年来日した宣教師ヴァリニャーノの報告書には、某キリシタン大名の言葉として「我らの国に住んでいる司祭たちが、日本人の美しい習慣や高尚な態度を学ぶようほとんど努力せぬことはまったく無知なことと思われる」と、宣教師に対する辛辣な批判が記されている（『日本巡察記』）。また、興味深いことに、明治時代の岡倉天心は著書『茶の本』（岩波文庫）の中で、「いつになったら西洋が東洋を理解するであろう、否、了解しようとするであろう」と言い、「西洋の態度は東洋を理解するに都合が悪い。キリスト教の宣教師は与えるために行き、受けようとはしない」と述べている。奇しくも、異なる時代の日本人が同じような指摘をしているのである。古来、他国に学び外来文化を巧みに摂取してきた日本人ならではの批判かも知れない。生誕500年を機にザビエルのことも、一宗教の聖人としてのみならず、アジアと西欧の交渉史上の人物として改めて見直すのもまた意義深いことである。

とうこう ひろひで（非常勤講師 日本・ポルトガル交渉史）